

今年は初めて、のげシャーレでの開催ということもあり、昨年とはかなり違った様子であった。昨年まで開催していた横浜赤レンガ倉庫 1 号館の 2 階は多目的スペースであり、ギャラリーや会合などにも使われる、いわゆる「日常」の場所を舞台に見立てて公演していたのに対し、今回の、のげシャーレは通称ブラックボックス、プロセニウム形式の劇場と同じく「非日常」の場所であった。

この「非日常」の場所には何の匂いも気配も存在せず、作家がゼロからすべて作り上げていかねばならず、そこが最もオモシロいところでもあり、労力を費やすところでもある。今回参加した人たちは本番の舞台に立って「うわぁ～何にもないよー！どーしよー！」と心の中で叫びながら、やっとこのことに気づいたのではないかと思う。そうなんです、「非日常」の舞台は、ゼロの場所なんです。映像審査で送られてきたビデオの多くは「日常」の場所（部屋など）で踊っている作品が多く、それをいかにして「非日常」の空間で展開するか、という新たな課題が追加された。今回は、創作せずにはいられない！という欲求を感じた人たちを選んだ。作品はまだ未熟であるが、それぞれの作家からその意思が感じられたのはやはり場所のせいであったかもしれない。

「日常」の場所と「非日常」の場所で踊っている身体の違い、空気の伝わる速度や時間の流れ方の違いなどもすっかり味わって欲しい。ゼロの場所で余分なものがそぎ落とされ、本当に自分たちがやりたい！と思うことを見つけて欲しい。もっと自由であって欲しい。創作に対する自分の欲求にとことん素直であって欲しい。老婆心ながら、私の心の叫びも記しておく。

伊藤千枝

今年はずはコンペティションⅡの在り方、存在意義を母体を含めもう一度審査員同士で深く検討することから始められた。コンペティションⅡは、必ずしも完成度が高く洗練されたセンスを持ち、飛び抜けた技術力を備えた作品が求められているわけではない。むしろ高い完成度や成熟度よりも自身の肉体と真摯に向き合いながらも同時代性を踏まえつつ、自分自身の問題をいかに盛り込んでいるか。

未熟でも既視感のないオリジナルでユニークなもの。今後伸び代があるもの。もしくは今後どのように進化成長していくかまったく予想できないもの。独自の物差しという固い結晶の固まりがすでに作品の中に備わっているもの。そんな作品が求められた。

それは日本の、そして世界の、ダンス界今後 5 年後 10 年後の未来に萌芽するであろう種子を捜し選別し、激励することでもある。オリジナルでユニークなものは強度があり、同時にとても脆く弱い。その独我論でもあり唯我論に満たされ、しかしダンスというジャンルに寄添い反撥し、自身の肉体の記憶と同時に人類史最古の表現のひとつであるダンスの記憶にも遡る本能を持っているものを求めてやまない。

身体意識の諸問題は人類すべての問題でもある。コンペティションⅡこそ、その問題を命懸けで問うことができる稀有な場であることを再び認識したい。

そして今回からは会場が代わり、漆黒の空間となった。その空間において如何に見せるか、存在するかという問題。これは横浜赤レンガ倉庫 1 号館というトポスとは全く異質な横浜のトポスでもあること。これは横浜ダンスコレクションそのものが異なった場の記憶をまたがって存在しだしたということでもある。場の記憶は自身の肉体の記憶とも化学変化を起こすはずである。

ヴィヴィアン 佐藤

横浜赤レンガ倉庫 1 号館 2 階スペースから、のげシャーレに会場を移し、空間を断ち切る柱が消え天井も高くなったことで、ダンサーがより踊りやすい環境になったことは喜ばしい。しかし、周囲がすべて真っ黒なブラックボックスになってしまったことで、今回のファイナリストたちはこの空間にどう対処すべきかかなり戸惑っているようにも見受けられた。身体によって空間をどう支配するか、あるいはその空間にダンサーの身体や小道具をどのように配置するか。身体の動きの組み立てだけでなく、空間に対する意識をさらに強く持つことが求められている。

妖精大図鑑率いる永野百合子の『まぐろ』は、そのユニークな発想の連なりが、今後観客を予想もつかないところに運んでいってくれそうな予感を抱かせる。次作を楽しみに待ちたい。ほかにも高瑞貴『ひとごと』、小林利那『鼈』、今枝星菜『自分の目を舐めたい、と思ったことはありますか。』、栗朱音『Quiet room』、小林菜々『ニセモノ』はじめ、荒削りながら光るものを感じさせる作り手は多かった。

浜野文雄